

宗像大社沖津宮社殿の特質

松本 将一郎

はじめに

玄界灘の孤島である沖ノ島は、島全体が宗像大社三宮の一つ沖津宮の境内であり、宗像三女神の一柱である田心姫神が祀られる。沖津宮の本殿は、標高約八十mの島中腹、急な石段参道を上ってわずかに開けた平坦地に位置する。タブノキ等の照葉樹林の鬱蒼とした森に覆われ、高さ十mを超える巨岩群が屹立する独特の空間である。見上げるほどの巨岩に左右から挟まれて、神の御座所である本殿が鎮座し、神饌の奉献や祝詞の奏上など人が儀式を行うための幣殿・拝殿が備わる。これら沖津宮社殿は幾度かの再建を経て、昭和七年に現在の社殿が建立された。

本稿は、沖津宮社殿の中でも本殿・幣殿・拝殿の主要施設に焦点をあて、現地調査や文献・絵図史料をもとに、沖津宮社殿の歴史の変遷と建築的特質について考察するものである。

筆者は、平成二十四年に国史跡「宗像神社境内」保存管理計画策定に伴う調査に参画し、沖津宮社殿の現地調査を行う機会を得た¹⁾。現在の沖津宮社殿については、『宗像神社史』上巻（昭和三十六年発行）や『宗像大社昭和造営誌』（昭和五十一年発行）に概略が記されるのみで、設計者や

造営経緯について不明な点が多い。宗像大社には、明治時代から昭和四十年代まで（一部、江戸時代の史料を含む）の神社宮繕に関する史料「宗像大社宮繕書類」（以下、「宮繕書類」）全三五巻が保管されており、近代における宗像神社の造営活動を知る上で重要な史料である。現地調査と共に「宮繕書類」の史料調査を行い、現在の沖津宮社殿の造営経緯について再検討したい。

一・沖津宮社殿の沿革

（一）沖津宮社殿の成立

沖津宮の起源となるのが古代の沖ノ島祭祀遺跡であり、航海安全を祈る自然崇拜に基づく神まつりが徐々に変化し、現在の神社へと通じる神祇祭祀が確立していく過程を追うことができる。沖ノ島祭祀遺跡は、沖津宮本殿の周囲に広がる巨岩群を中心に二十二ヶ所確認されている。祭祀の場は、巨岩の岩上（四世紀後～五世紀前）から始まり、岩陰（五世紀後～七世紀）、半岩陰・半露天（七世紀後～八世紀前）、平坦地の露天（八世紀～九世紀末）へと変遷する。沖ノ島における古代祭祀は九世紀末に終焉を迎

えるが、相前後して、七世紀後半までには、沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮、九州本土の辺津宮にそれぞれ、『古事記』、『日本書紀』に登場する田心姫神・湍津姫君神・市杵島姫神の宗像三女神を祀る宗像神社が成立した。

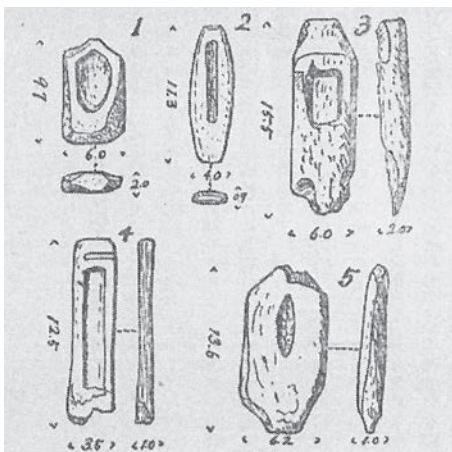
祭祀の場は巨岩から社殿へと遷るが、社殿成立の時期については未解明である。日本全体における社殿成立について、近年の研究では七世紀後半に官社制の創出を画期とし、神社に社殿が整備されたという説が有力視されている^⑤。七世紀末は律令国家の体制が整えられた時期であり、国家の主導の下、祭祀儀礼や神社施設等、祭祀の体系化が進み全国に広まったとされる。また官社制の創出に伴い、天武十年（六八一）の「詔畿内及諸国修理天社地社神宮」（『日本書紀』同年正月丑条）や、天平神護元年（七六五）の「遣使修造神社於天下諸国」（『日本書紀』同年十一月壬戌条）等の全国の神社施設に対する修繕の命令が出されており、八世紀頃に地方神社における社殿の普及が指摘される^⑥。

ただし、沖ノ島の場合は絶海の孤島という特殊な立地条件のため、常設の社殿を持たずに巨岩やその周囲での祭祀が継続していた可能性は否定できない。沖ノ島では八世紀になると、それまで祭祀の場であった巨岩群から離れた平坦地で露天祭祀が行われるようになる。古代祭祀の最終段階である露天祭祀から社殿祭祀へ移行、もしくは並行する時期やその契起が論点となるが、文献史料・考古資料共に社殿の存在を示す資料は江戸時代に至るまで確認できず、現時点ではその論証は難しい。露天祭祀の遺跡は一・二・三号遺跡の三箇所確認されており、巨岩から南西に約三十m離れた一号遺跡で発掘調査が行なわれ、大石を中心とする祭壇状の石積遺構と

共に土師器・須恵器や滑石製形代など大量の奉獻品が出土している^④。また、未調査ではあるが沖津宮社殿が建つ石垣下には、一号遺跡と共通する露天祭祀時の土器や滑石製形代等の包含層（写真一）が確認されており^⑤、昭和七年の現在の社殿再建の際、社殿床下から滑石製舟形五個と石斧一個が出土したことが竹内亮氏から報告されている（図一）^⑥。現在の沖津宮本殿が建つ敷地は、八世紀頃から祭祀場として利用されており、少なくとも古代祭祀から現在の社殿へと続く祭祀の歴史が積層した場所といえよう。古代祭祀の終焉後、沖ノ島では、中世を通じて宗像大宮司家によって神事が連続と続いていった。



写真一 沖津宮石垣下の遺物包含層（3号遺跡）
（出典：『宗像沖ノ島 II 図版』宗像大社復興期成会、1979）



図一 本殿床下から出土した石製船形
（出典：竹内亮「続宗像沖ノ島雑記」『島』、1934）

(二) 近世の沖津宮社殿

沖津宮社殿に関する史料は江戸時代に初めて確認できる。「宗像家文書」に正保元年(一六四四)「沖島御遷宮」^⑦とあり、本殿造営後の遷宮祭の齋行が知られ、正保元年以前に本殿が存在したことが確認できる。ただし、社殿がいつ頃まで遡りうるのか明らかではない。

沖津宮社殿の絵図史料としては、十七世紀後半から十八世紀前半頃成立の「沖ノ島図」(図二)が現在確認されている絵図の中で最も古く、かつ詳細に描かれている。「沖ノ島図」は第四代福岡藩主・黒田綱政(一六五九―一七七二)筆とされる。綱政は江戸で狩野安信に師事して絵画を学び、元禄元年(一六八八)に福岡藩主になると、神社の再興と共に自筆の絵画を領内の神社に数多く奉納している。宗像神社と綱政の関わりとしては、元禄十四年(一七〇二)に辺津宮に自筆の絵馬を奉納したことや^⑧、寛永八(一七一二)年五月に綱政の命により沖津宮本殿・拝殿を造営したことが記録に残る^⑨。また、元禄十六年(一七〇三)には貝原益軒により編纂された『筑前国続風土記』が藩主綱政へ献納されている^⑩。「沖ノ島図」の描写はこの『筑前国続風土記』の沖ノ島に関する記載内容とよく合致し、写実性の高い描写といえる。

「沖ノ島図」を見てみると、海を背景に沖ノ島と小屋島、御門柱の岩礁を一幅の掛軸にまとめた絹本着彩画であり、沖津宮境内全体の景観描写に主眼をおいた構成である。沖ノ島は一ノ岳・二ノ岳・三ノ岳が連なり、三ノ岳には石英斑岩が露頭した岩肌を灰白色に描く。海岸線は断崖絶壁で、正面の入江が唯一の船着場であり、小舟が二隻描かれる。島の中腹に沖津

宮本殿が鎮座し、背後に描かれた巨岩が目を惹く。本殿前面には拝殿、右傍に末社の小社殿が三棟描かれ、参道を下った高台には御供屋と末社、海岸には福岡藩の番所が描かれる。

本殿・拝殿の描写に着目すると、斜投影図式に描かれ、石垣で造成された敷地に本殿・拝殿が直線上に並ぶ。本殿は三間社、切妻造、平入、屋根に千木が上り、周囲に柵列が巡る。拝殿は、切妻造、妻入、桁行二間・梁間一間で正面・側面を吹き放しに描く。本殿を中心とする社殿配置はほぼ現況に近く、遅くとも江戸前半には、現在に近い社頭が整ったといえよう。

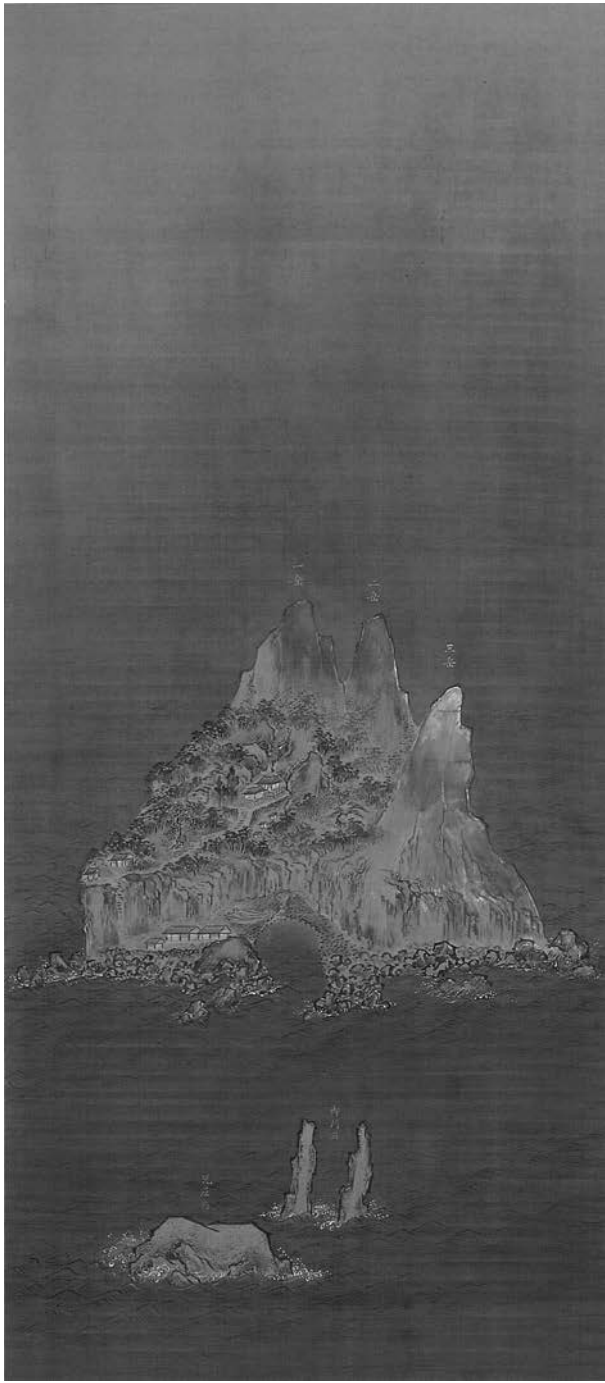
文献記録から社殿の形態を探ってみると、『筑前国風土記』(元禄十六年「二七〇三二」)には、「神殿方九尺、又拝殿あり」とあり、本殿の規模について初めて知ることができ、後の記録でも本殿は「方九尺」と江戸時代を通じて同規模である。『筑前国續風土記拾遺』(天保八年「一八三七」頃)には「神殿、拝殿、渡殿あり」と記され、本殿・拝殿の他に渡殿の存在が確認できる。また、「澳津宮社記」(天明四年「一七八四」以降)には、「御本社三間社、九尺四面、柿葺、千木・堅魚木、箱棟上る」^⑪とあり、三間社の本殿屋根は柿葺で箱棟をあげ、千木・堅魚木の棟飾をのせていたことがわかる。

本殿内の神座については、『筑前国続風土記』に「御神を田心姫とす。祭る所の神座の列左のごとし。左第三市杵島姫命 中第一田心姫命 右第二湍津姫命」とあり、三間社の本殿内では主祭神である田心姫を中央、相殿神として両脇に市杵島姫命、湍津姫を祀っていた。御神体については、

『筑陽記』（宝永二年「一七〇五」）には、「神体岩也。万治元年河野氏何某、金銅ノ神体ヲ造立」とあり、金銅製の神像であったことがわかる。

江戸時代の沖ノ島で注目したい点は、寛永十六年（一六三九）より、福岡藩によって異国船警備のため福岡藩士の在番を沖ノ島に配置したことである¹²。「沖嶋詰方心得記」¹³によれば、「一、御殿其外、何方ニテモ損所ハ書留置、帰リノ節役所江差出致候」、「一、御殿初、掃□（除）ハ御加子申合可致候事」とあり、沖ノ島在番中には、遠見番としての勤めだけでなく、社殿の破損状況の点検や境内の清掃等の境内の維持管理の役目を担っていた。沖ノ島では、天正十四年（一五八六）の宗像大宮司家の滅亡後、その家臣であった一ノ甲斐河野家が社家として沖津宮の神事を担っていたが、

沖ノ島へは年二回渡島して神事をするのみで、日常は居住する大島で沖津宮の祭祀を行っていた¹⁴。沖津宮本殿は森に覆われた湿気が多い立地であり、木造社殿の定期的な維持補修は不可欠である。これまで無人であった沖ノ島に福岡藩士が常駐することによって、恒常的に社殿を維持管理する体制が備わったといえ、沖津宮における社殿殿造営の画期の一つと捉えたい。



図二 「沖ノ島図」、17世紀後半～18世紀前半、黒田綱政筆、福岡市博物館所蔵

(三) 近代の沖津宮社殿

江戸時代を通じて、宗像神社の造営は福岡藩により行われていたが、明治四年（一八七二）に太政官布告により神社は国家管理とされ、内務省神社局が官国弊社の管轄を管轄した。宗像神社は、明治四年に国幣中社、明治十八年（一八八五）に官幣中社、明治三十四年（一九〇一）には官幣大社へ昇格した。また明治四年以降、辺津宮から神官が百日交代で沖ノ島に常時滞在して奉仕することになった¹⁵⁾。

明治期の社殿については「宗像神社明細帳」（以下、「明細帳」）から詳細に知ることが出来る。「明細帳」には、神社創立の由来、祭神、祭式と共に、社殿について創建年代や形式について図面（図三）を添えて記す。

本殿は、霧囲付の三間社流造（梁間七尺八寸、桁行一丈二尺六寸）で亀腹基壇上に建つ。背面を除く三面に切目縁が廻り、正面に向拝、木階五級が付き、正面中央間に両開板唐戸が入る。身舎は前後を内外陣に二分し、さらに内陣を三分割する。天井は内外陣とも竿縁天井で、屋根は枋葺、箱棟に千木二組、勝男木四組が乗る。ただし「明細図書」では、「前左右後両妻共欄干付」と四面に欄干付の縁が廻る記載があり、平面図と一部齟齬がみえる。

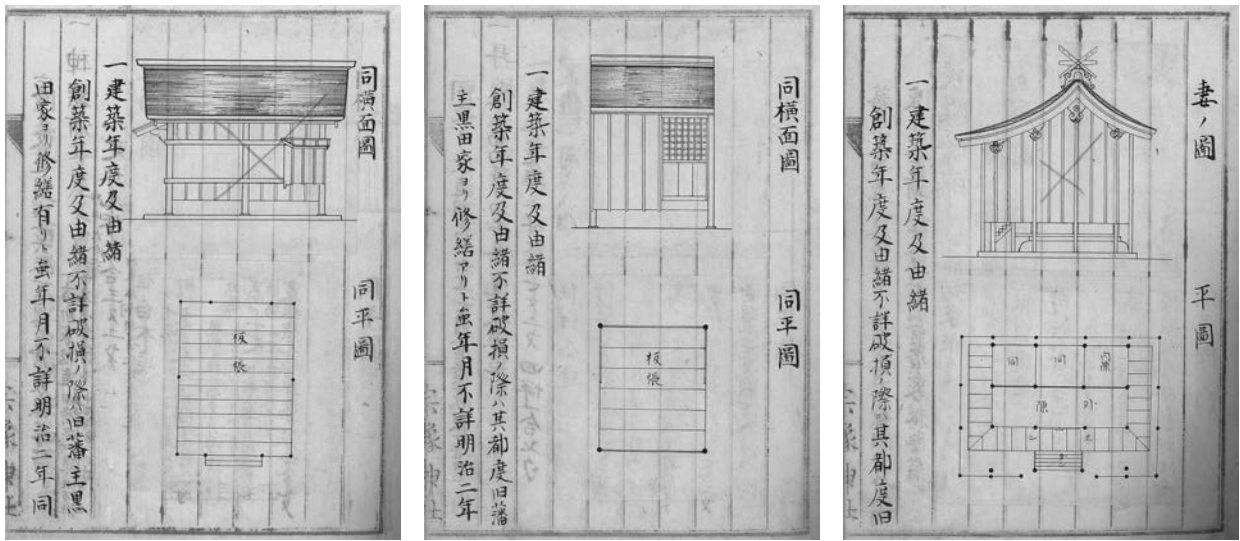
渡殿は、梁間一間（七尺）、桁行一間（六尺三寸）、両下造、板葺である。柱間は正面・背面を開放し、渡殿を介して本殿・拝殿を繋ぐ。両側面は縦板張として片引戸を入れる。床は全て板張りである。

拝殿は、梁間三間（一丈二寸）、桁行二間（一丈三尺五寸）、切妻造、妻入、板葺とし、正面に持送付の庇を張り出す。柱間装置は、正面中央間を

開放、両側面を腰壁板壁で戸袋がつく。床は全て板張りで、妻飾りは扱首組とする。

これら社殿の建立年代について「明細帳」には、「創築年度及由緒不詳破損ノ際ハ其都度旧藩主黒田家ヨリ修繕有リト雖年月不詳明治二年度同家ヨリ改造同十六年七月官費家根葺替」とある。明治二年（一八六九）の黒田家による改造が、再建なのか修理なのか判然としないが、「明細帳」に記載された社殿を維持修理しながら昭和七年の再建まで使用していたことがわかる（写真二）。

その後の修理は、明治十六年（一八八三）に本殿・渡殿・拝殿の屋根葺替、明治三十四年（一九〇一）に本殿修理、明治四十五年（一九一〇）に本殿・渡殿・拝殿の屋根葺替と拝殿に神饌準備所が付加され、大正二年（一九一三）に本殿・渡殿・拝殿の修理と屋根葺替えが記録として確認される¹⁶⁾。なお現地調査時に、明治十六年修理棟札¹⁷⁾と大正二年修理棟札¹⁸⁾が、沖津宮本殿内の物置で確認された。明治十六年の修理棟札には、福岡県「土木課土木担任戸畑惣三」と記されており、国が管轄する国弊社であっても、実際には福岡県に属する技術者によって営繕事業が行われていたことがわかる。



図三 「國幣中社宗像神社沖津宮明細帳（右：本殿、中：幣殿、左：拝殿）、明治4年～明治18年、福岡県所蔵



写真二 沖津宮の日本殿・拝殿（昭和5年5月10日内務省神社局撮影、宗像大社所蔵）

二、現在の沖津宮社殿

(一) 造営経緯

昭和初期の宗像神社は、『古事記』、『日本書紀』に記される天照大神の神勅「奉助天孫而為天孫所祭」の由緒をもとに、勅祭社御加列の請願運動を展開していた。その運動に併せて勅祭社の社格に相応しい往時の姿を取り戻すべく、荒廃した境内の復興計画を進めていた¹⁹。昭和六年三月五日に宗像神社宮司幡掛正木より内務大臣安達謙蔵宛に提出した「沖津宮神殿並二拝殿改築願」及び「官国弊社各社共通金下附願」草稿²⁰には、沖津宮社殿の状況について以下のように記す。

「沖津宮神殿並二拝殿ハ慶長年間藩主ノ造営ナルモ鬱蒼タル森林中ニ在リテ常ニ湿潤ノタメ柱、土台、板張り家根等ノ腐朽甚シク最早ヤ姑息ナル修繕ニテハ到底維持出来ズ根本的ニ改築ノ止ム無キ実状ト相成リ尚又御神座ヲ始メ御殿内ノ御調度モ粗雑ヲ極メ全ク村社ニモ比ス可カラザル状態ニテ洵ニ神明ニ對シ奉リ恐懼ニ堪ヘザル次第ニ御座候」

宗像神社は内務省に対し、沖津宮の本殿・拝殿の朽損を訴え、部分的な修理ではなく本殿・拝殿の再建と御神座調度品の新調に関する許可と巨額な造営費用に対する国庫補助を申請した。その後の建設経緯は、昭和七年八月七日に工事監督の三條榮三郎により記された「工事報告」²¹から知ることができるといえる。

昭和六年十月五日、内務省より沖津宮本殿・拝殿・幣殿・神饌所の改築許可を得て、昭和六年十月三十日、仮遷座祭を執行して御神霊を本殿から仮殿へ移した後、福岡県の直営で造営工事が始まった。「工事報告」には、

「本工事中最憂慮シタルハ海上及參道運搬ト狭隘ナル社地ニ納マリヨク建設出来ルカノ二点ナリ」とあり、九州本土から六十km離れた沖ノ島への材料運搬や狭隘な敷地での施工に苦心したようだ。木材は、当時国産の大径材が不足していたため台湾檜が使用され、現場施工前に辺津宮境内に設けた作業場で出来る限り材料を加工し、沖ノ島へ運搬後、現地で組み立てられた。特に木材の運搬には地元氏子の勤労奉仕によるものが大きく、昭和六年十一月十七日に神湊に到着した木材は、神湊町民によって荷揚げされ、木材の乾燥と加工のため辺津宮の作業場まで運搬された。昭和七年一月二十六日に御用材加工初めを祝う鉦始祭執行が執り行われ、木材の切組作業完了後、五月二日に田島青年団奉仕によって再び神湊まで材料が運搬・船積された。沖ノ島への材料運搬の際には、大島の漁師組織である「沖ノ島仲間」²²の協力のもと、漁船で沖ノ島へ運ばれた。

沖ノ島での現場工事は工期一ヶ月余と順調に進んだようで、昭和七年五月十六日立柱祭、五月二十一日上棟祭が執り行われ、六月二十五日に竣工した。本殿の竣工後には、殿内の御神座や調度品を新調した後、八月六日に沖津宮正遷座祭を執行して御神霊を仮殿から新築された本殿へ移し、翌八月七日に沖津宮遷座奉祝大祭を沖津宮遙拝所にて執行した。

建設総費用は、社殿改築工費一万二千九百三十三円三三銭、殿内調度工費八五〇円となり、内務省の各社共通金一万二百七十七円、宮内省御下賜金

五百円、氏子や崇敬者からの寄附金二千百五十六円四十八銭がその費用に当てられた²⁵。

その後は昭和二十九年と昭和三十三年に屋根の葺替え修理が行われ、昭和三十三年の修理の際に檜皮葺から銅板葺へと変更され、現在に至る。

(二) 建築家と大工

「工事報告」より、沖津宮社殿の造営に関わった建築技術者が新たに判明した。建築家は内務省技師・角南隆と元福岡県土木課技師・三條栄三郎、大工棟梁は地元宗像郡の宮大工・荻原亀吉であった。ここでは、三名の足跡と宗像神社との関わりについて中心に述べたい。

角南隆²⁴（一八八七～一九八〇）は、明治二十年（一八八七）岡山県に生まれ、大正四年（一九一五）東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、明治神宮造営局に入り創建時の社殿設計に関わる。大正八年（一九一九）より内務省神社局技師となり、昭和十四年（一九三九）に造営課長を務めた。角南は内務省の技術官僚として大正から昭和戦前期の神社営繕事業の指導的立場にあり、神社にモダニズムの建築思想をとり入れ社殿の設計手法を構築し直した建築家であり、近代の神社建築史上重要人物の一人に位置付けられる²⁵。角南と宗像神社の関係は深く、宗像神社宮司・幡掛正木から「宗像神社復興計画案」策定の協力要請を受け、角南は昭和五年五月三日から沖ノ島へ渡って一週間参籠した後、辺津宮において沖津宮社殿改築案の略図を幡掛宮司に提示した²⁶。なお、宗像大社には、角南が沖ノ島滞在中に撮映したと思われる沖津宮社殿の古写真（写真二）が残されている²⁷。そ

の後も角南は、昭和二十七年に宗像神社史編纂委員会の顧問に就任し、『宗像神社史』（上巻は昭和三十六年、下巻は昭和四十一年に刊行）の編纂に関わっている。

ただし、角南自身が沖津宮社殿の設計にどこまで関与したのか判然としない。内務省神社局は約二百社余ある官国弊社の営繕事業を数多く抱えており、角南自らが細部まで設計した例は少ないとされる²⁸。「工事報告」にも「内務省主任技師角南隆氏ノ設計ヲ基準トシ」とあり、角南の他に設計に参画した人物が想定される。そこで注目したのは「工事監督 三條栄三郎」である。

三條栄三郎²⁹（一八七六～一九三五）は、明治五年（一八七二）山形県に生まれ、中学時代には四年先輩の伊東忠太（後に建築史家、東京大学教授となる）と親睦を結んだ。明治三十一年（一九〇八）に蔵前東京高等工業学校（現東京工業大学）教員養成所を卒業し、仙台工業学校、熊本県立工業学校、福岡県立工業学校の教員を歴任し、建築技術者を育成した。その後、佐賀県建築技師を経て、明治四十一年（一九〇八）に福岡県土木課建築技師となり、多くの公共建築の設計・監理に従事した。主な建築作品は、フレンチ・ルネサンス様式を基調とした旧福岡県公会堂貴賓館（明治四十三年、重要文化財）や大正時代の新流行であるセセッションを取り入れた旧福岡県庁舎（大正四年、現存せず）等の多くの官庁建築があり、各種様式を巧みにまとめ上げる建築家としての確かな力量を示している。また、三條は福岡県庁在職時より内務省地方技師も併任しており、筥崎宮廻廊の新築（大正三～六年）、大宰府天満宮楼門の修復（大正初）、宮地嶽

神社総合計画（大正七年）など、福岡県内の神社建築の設計や造営計画を策定する等、福岡県内の社殿造営にも従事した。その後、大正十二年（一九一三）より長野県庁に転出し宮繕課長を務めるが、病のため昭和四年に福岡に戻り、昭和十年に急逝するまでに福岡県庁・大分県庁・長崎県庁の嘱託として社寺建築の修復や特別保護建造物指定の申請などに携わった。三條は、内務省地方技師の頃より同郷の伊藤忠太、関野貞、角南隆らと親交を結び、古建築の歴史研究や修復を手がけており、それらを通じて社寺建築の知識を習得したと推察される。

沖津宮社殿の造営に関しては、昭和六年十月十七日には宗像神社宮司・幡掛正木から福岡県知事・川淵洽馬へ当時福岡県嘱託であった三條の沖津宮改築工事監督の就任依頼が提出された³⁰。三條は、「工事報告」の草稿段階では「角南隆氏ノ指導ト計画ヲ基準トシ」と記しており³¹、角南の指導のもと、実務経験に長けた三條が施工管理と共に実施設計に深く関与したと思われる。

萩原亀吉³²（一八七八～一九三八）は、明治十一年（一八七八）宗像郡勝浦村に生まれ、朝倉郡秋月の木工棟梁である八尋氏の下で修行後、地元宗像郡津屋崎にて木工棟梁として独立した。萩原亀吉が携わった建築として、宮崎宮廻廊（福岡市箱崎、大正三～六年）、年毛神社本殿・拝殿（宗像郡勝浦、大正十五年）、豊山神社（宗像郡勝浦、昭和十二年）等がある³³。また、昭和七年の沖津宮造営時には、木工棟梁として辺津宮作業場での材料の墨付け・切組から、沖ノ島での現場施工まで腕を振るった。その後、昭和八年の沖津宮遥拝所造営時も木工棟梁を担い³⁴、昭和十年に

は角南隆や宗像神社関係者らと宗像神社の復興計画等の協議に参加するなど³⁵、昭和初期の宗像神社の造営に数多く関わった人物である。

なお、「宗像大社造営史料」には、昭和七年の沖津宮造営時の大工として萩原亀吉と共に「小山富次郎」の名前が見える³⁶。小山家は箱崎で代々続く屋根大工の家系（現 小神社寺工業所）であり、昭和二十九年の沖津宮の修理棟札に「家根屋 福岡市箱崎 小山富次郎」³⁷とあり、沖津宮造営時にも屋根葺を担当したと思われる。

最後に木材に使用した台湾檜の調達者について付け加えたい。「工事報告」草稿には、「木材ハ葦津耕次郎氏の斡旋ニ係ル台湾檜ノ優良材ヲ特ニ撰買」とある。葦津耕次郎³⁸（一八七八～一九四〇）は宮崎宮の社家の家に生まれ、神道思想家としての活動と共に大正十二年（一九二三）より民間の建築事務所である社寺工務所を設立し、当時枯渇していた国産檜の代替材として台湾檜を大量に輸入し、全国の社寺建設を手がけていた。特に大正四年（一九一五）から昭和三年にかけて実施された宮崎宮の拝殿・楼門の修復や廻廊新築等の造営時には、自ら台湾へ赴いて朝鮮総督府の案内のもと檜材を視察・購入し、日本海軍の特務艦「野島」によって宮崎宮まで廻送した。この宮崎宮廻廊造営には、角南隆と三條栄三郎が設計者、萩原亀吉が大工として参加しており、宮崎宮造営時の建築技術者や材木の調達経路が、宗像神社の造営へ引き継がれたとすれば興味深い。

(三) 社殿形式

現地調査をもとに現在の沖津宮社殿の建築形式を概観したい(図四・五)。沖津宮社殿が建つ敷地は、巨岩に挟まれた狭い土地で、斜面を削って雛壇状に三段に造成し、沖ノ島の自然石を用いた石積で法面を固める。社殿は、後段から本殿・幣殿・拝殿が中軸線を揃えて西南面して建つ。本殿・幣殿部分は岩盤上に、拝殿部分は石垣で造成された地盤上に位置する。社殿前面には深さ約一・七mの空堀があり、石橋を掛けて参道から社殿へ渡す。本殿南には、天照大神を御祭神とする末社大神宮が北面して建つ。

本殿は三間社流造で、桁行三間・梁間二間の身舎に一間通りの庇を四面に廻し、正面に桁行三間の向拝がつく。この庇下の空間を身舎柱と庇柱を梁で繋いで構造上一体化し、室内に取り込む。正面には登り高欄付木階五級、その両脇に勾欄付の切目縁がつく。

身舎は亀腹基壇上に丸柱を建て、軸部を足固貫と頭貫で固め、地長押、切目長押、内法長押を廻す。組物は平側に大斗肘木、妻側に平三斗をのせる。庇は自然石礎石に面取り角柱を立て、足固貫、内法貫、頭貫で固め、組物は舟肘木を載せる。

内部は、身舎を内外陣に二分し、さらに内陣を間口一間の小部屋に三分割して個別に板扉を設け、宗像三女神の御神体を奉安する。内外陣とも拭板張で、外陣の正面柱間に両開き板唐戸、左側面に掃除口として片開板戸が入る。庇下の空間は、外陣への通路と物置として利用する。

軒は二重繁垂木、妻飾は豕扱首組とし、切懸魚が付く。正面を除く三面に腰庇を廻し、大斗肘木で支える。屋根は、銅板葺、箱棟を上げ、千木二組、

勝男木が三組乗る。箱棟と鬼板には、宗像大社神紋である檜の葉紋の飾金具が付く。なお、「官幣大社宗像神社沖津宮殿内装飾設計図 神座ノ部」³⁹⁾によると、宗像三女神の各御神座には、御室を置いて、御厚畳と御茵を敷き、扉に御幌、簾を下ろし、内外陣には壁代などの調度品を備えていることがわかる。

本殿前には、幣殿・拝殿・神饌所の機能を一棟に納めた複合式の社殿が建つ。その形式は、切妻造、妻入、梁間三間・桁行五間の縦長平面で、前三間を拝殿、奥二間を幣殿とし、左側面に切妻造、一間四方の神饌準備所が張り出す。

軸部は、自然石の礎石上に面取り角柱を立て、内法貫、頭貫で固め、腰長押、内法長押を廻す。また本殿の向拝柱と幣殿の側柱を共有することで、本殿と内部空間を連続させる。柱間は、正面中央間を両引き格子戸、柱間を狭くした両脇間を格子壁とし、右側面を腰板壁・雨戸付、左側面を引き違い板戸とし、幣殿は正面・背面の中央間を吹き放しとする。架構は、柱頭に舟肘木を置いて桁を受け、梁を渡して成の高い板幕股を置き棟木を支える。この板幕股は、辺津宮拝殿を思わせる復古的な意匠である。

軒は一重疎垂木、妻飾は豕扱首組とし、屋根は銅板葺で正面に庇が付き、箱棟を上げ、菊の御紋の飾金具が付いた鬼板と鳥衾がつく。内部空間について、拝殿は床を拭板張とし、天井を張らずに化粧屋根裏として架構を見せ、妻壁に掲げた神勅扁額へ視線を促す。幣殿は天井を竿縁天井とし、板張の床面を拝殿より一段高くあげて格式の差を示す。

(四) 新様式「沖津宮造り」

「官幣大社宗像神社沖津宮社殿改築工事設計書」⁴⁰（以下、「設計書」）には「様式 沖津宮造り」という新たな様式名が記されており、沖津宮に相応しい新たな造形を創り出そうという意識が表れている。

神社は、御神体が人の目に触れることがないため、神の存在や神聖さは本殿の外観によって表現される。沖津宮社殿は総檜普請の素木造で装飾を抑えた清浄さのある意匠である。その一方、造形上の力点は本殿を見上げた視線の先にある巨岩と屋根の構成に集約される。巨岩に挟まれた狭隘な敷地に対して、前身本殿では巨岩の岩影に本殿全体を納めていたが、現在の本殿は三間社流造の形式を踏襲しつつも、屋根勾配をきつくして棟高を上げ、屋根を巨岩の岩肌に密着させて建てている。神の依り代とされる「磐座」の巨岩と流造の屋根が一体となった力強い意匠であり、垂直方向にプロポーションを強調することで神の御座所である本殿の崇高さを演出する。屋根上の千木・堅魚木は前身社殿より大きくなり、巨岩との取り合いによって左右対称の配置を意図的に崩しており、巨岩と社殿、両者の関係を表現する手法として、小さな操作でありながらその視覚的效果は大きい。

また、現在の本殿は、桁行三間・梁間二間の身舎の四面に庇が廻る三間四面の「両流造」の平面であるが、庇空間を室内に取り込み本殿全体の規模を大きくすることで荘厳化を図っている。

「設計書」には「神殿妻流レ造り幣殿拜殿及神饌準備所共総体ヲ一棟トナシ」とあるように、本殿・幣殿・拜殿・神饌準備所の各施設を一棟にまとめ上げて内部空間を一体化させている。こうした社殿の複合化の手法は、

昭和戦前期の角南隆を中心とする内務省神社局の営繕組織の設計の特徴であり、屋根をつなげて雨仕舞や日常の祭祀奉仕の便に配慮して、神職の動作空間が途切れることなく連続させる。この連続した平面は、その上に架かる屋根形状として外部意匠に立ち上がる。一際高くそびえる本殿の流造の屋根に、拜殿の切妻造の屋根が幣殿を超えて連結し、その脇に一段棟を下げた神饌準備所の屋根がとりつく。各社殿の空間の格の違いを屋根の高さで表現し、屋根が連なる荘厳な社殿をつくり出す。

全体としてみると、近世以来の伝統様式や空間構成を尊重しつつ、外部意匠の荘厳化、内部空間の祭祀奉仕の機能向上を実現させている。

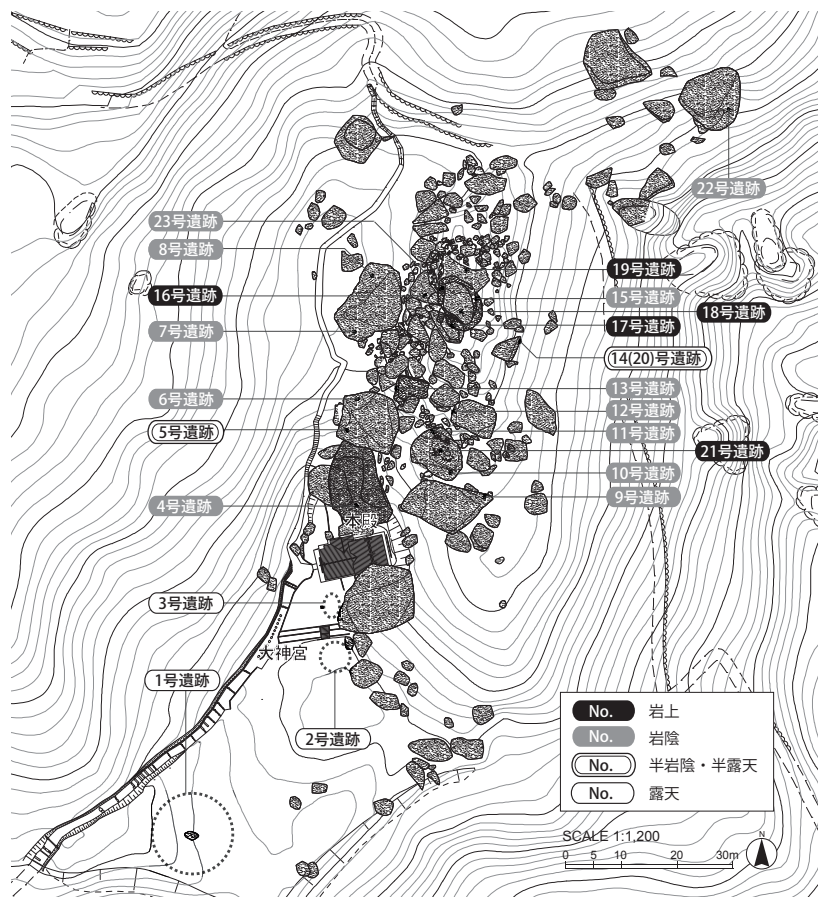
おわりに

本稿では沖津宮社殿に焦点をあて、通史的にその変遷を概観してきた。巨岩で営まれた古代祭祀の場は、巨岩から離れて平地へと遷り、現在の沖津宮社殿へと祭祀の場が収斂されていく。自然神から人格神へと神観念の変化と共に神を祀る空間も変化し、神の御座所である本殿には、御神体として神像を奉安し、殿内の調度品が整えられ日々神饌が備えられる。沖津宮社殿は、こうした千六百年以上もの間受け継がれてきた沖ノ島に対する信仰を今日に継承する場として重要である。

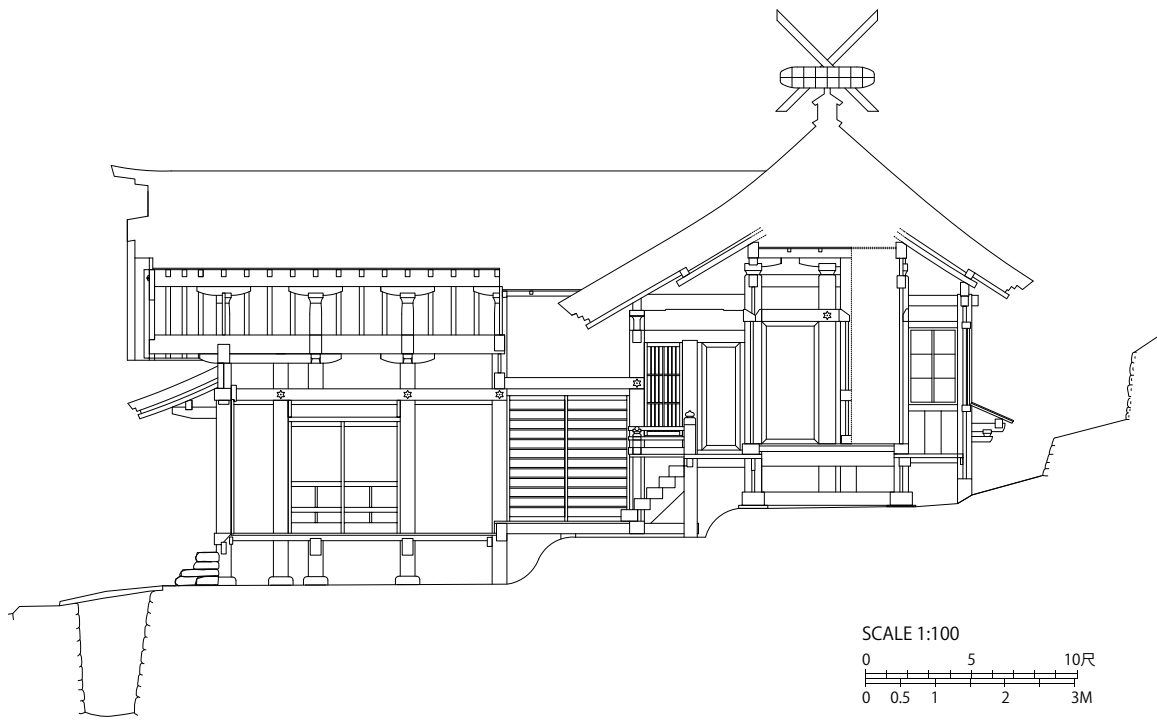
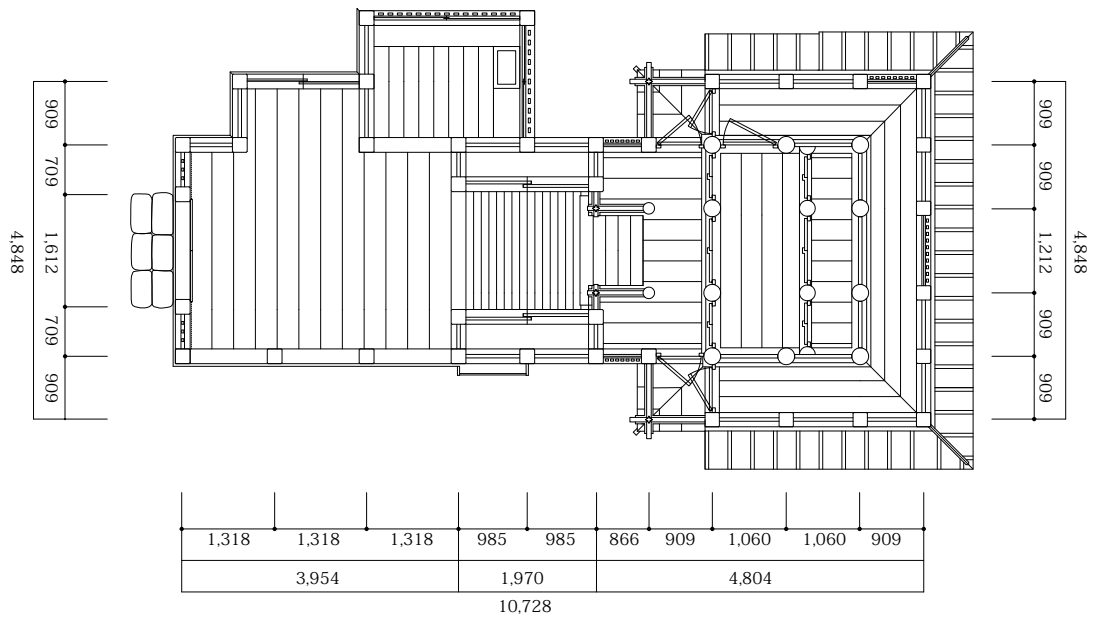
また、現在の沖津宮社殿について歴史の変遷を辿ってみると、近世以来の伝統的な形式や空間構成を尊重しつつも、近代における新たな造形の出現が読み取れる。「磐座」とみなされる巨岩を強く意識した流造の本殿形式

は独自のものがあり、近代を代表する神社建築家である角南隆が設計に関与する等、その意匠の構成力は特筆すべきものがある。また、現在では殆ど入手不可能である大径長尺材の良質な台湾檜の使用によって、これまでにない大規模な社殿の造営を可能としている。玄界灘の遙か沖合に位置する沖ノ島への材料運搬、現場施工についても、地元建築家や宮大工、氏子崇敬者による勤労奉仕や浄財供出によるものが大きく、地域総ぐるみで造営されたという点も意義があり、近代の神社建築としてその価値は高い。

なお、本稿では沖ノ島における社殿の成立について既往研究に基づく概要の整理に留まっている。この点は古代祭祀終焉以降に祭祀の中心の場となった九州本土の辺津宮や、通常立ち入ることが禁じられている沖ノ島を遠くから拝むための大島の沖津宮遙拝所など、相互に関連をもつ宗像神社三宮全体での社殿の成立について検討する必要がある、今後の研究課題としたい。



図四 沖津宮本殿・幣殿・拝殿 配置図



図五 沖津宮本殿・幣殿・拜殿 平面図・断面図



写真三 沖津宮本殿・幣殿・拜殿 全景



写真四 背面から見る沖津宮本殿と巨岩

(1) 宗像市教育委員会は、平成二十四・二十五年度にわたり国指定史跡「宗像神社境内」及び国指定天然記念物の「沖ノ島原始林」の保存管理計画策定に伴い現地調査を実施した。平成二十四年十月九～十日に沖津宮社殿の建築調査を実施し、沖津宮本殿・幣殿・拝殿と末社大神宮の平面図・断面図・配置図の実測と写真撮影を行った。

(2) 丸山茂「神社建築の形成過程における官社制の意義について」(『神社建築史論―古代王権と祭祀』中央公論美術出版、二〇〇一)、山岸常人「神社建築の形成過程―平安時代前期・中期を中心に―」(『史林』第九十八巻第五号史学研究会編、二〇一五年)など。

(3) 有富純也「神祇官の特質―地方神社と国司・朝廷―」、「神社社殿の成立と律令国家」(『日本古代国家と支配理念』東京大学出版会、二〇〇九)。

(4) 『宗像沖ノ島 I』(第三次沖ノ島学術調査隊編、宗像大社復興期成会発行、一九七九) 六十～六十四頁。

(5) 『宗像沖ノ島 I』(前掲) 二四七～二四八頁。

(6) 昭和七年から八年にかけて九州大学農学部沖ノ島調査隊によって沖ノ島の生物調査が実施された。竹内亮氏は植物学的部門を担当し、「続宗像沖ノ島雑記」(『島』一誠社発行、一九三四)の中で「昭和七年に瀛津宮の舊社殿の御改築に際し、その御床下から出土した石斧等と共に五個の石舟を見る。」と報告している。

(7) 『宗像神社史』上巻(宗像神社復興期成会編、一九六二)、五一五頁。

(8) 「黒田家新統家譜卷之十一」綱政記四 元禄十四年(一七〇二)の項には「香椎・宇美・伊野・宰府・警固・住吉・志賀・鳥飼・志登・櫻井・名嶋・田嶋・大分等

に、自畫の繪馬を寄進せらる。」とある。

(9) 安永二年(一七七三)に沖津宮大宮司河野信濃守が福岡藩寺社奉行に提出した「沖津宮指出目録」に、寛永八年(一七一二)「神殿・拝殿ヲ藩主黒田綱政公ヨリ御造営」の記載がある(『宗像神社史』上巻、前掲、五一七頁)。

(10) 「黒田家新統家譜卷之十一」綱政記四 元禄十六年(一七〇三)の項に「筑前統風土記成る。凡三十卷、十一月十八日貝原久兵衛上進す。」とある。

(11) 『宗像神社史』上巻(前掲) 五一六頁。

(12) 『筑前国統風土記』卷之十五宗像郡上に「寛永十六年より以来、國主より島守を置玉ふ。足輕三人、水主四人、大島より役夫二人、凡九人かはるく来る。五十日を以て限とす。」とある。

(13) 福岡藩士沖ノ島在番の心得を記した史料で、天保七年から十二年頃にかけて書写したものとなる(宮本常一編『日本庶民生活史料集成』第二巻探検・紀行・地誌西国編、三一書房、一九八四)。

(14) 『筑前国統風土記』卷之十五宗像郡上には、「春三月、冬十月、兩度祭あり。むかし大宮司ありし時は、秋も祭り有しか、近世は秋を略して祭らず。(中略)社人は唯一人大島にあり。其家を一ノ甲斐と云、河野氏と稱す。」とある。

(15) 『宗像神社歴史』下巻(宗像神社復興期成会編、一九六六) 三六一頁。

(16) 『宗像神社史』上巻(前掲) 五二〇頁。

(17)「明治十六年修理棟札」

宮司江上澄 主典日並永通 社務所常雇
 祢宜桑野弘文 等外出仕 安部繁
 主典越智正文 河野通来 同
 同 勝屋茂彦 小方真言 立石護
 同 高向秀實 中野森平
 同 宗像秋續

明治十六年七月九日着手同八月十二日落成

〔表〕

御本殿渡殿拝殿御家上御葺替并御炊舍宿直所船手小屋御修繕

出張

縣令岸良俊介

土木課土木擔任戸畑惣三

大工四人
家上五人
日雇二人

〔裏〕 記載なし

(18)「大正二年修理棟札」

大正二年三月十六日着手
大正二年三月卅二日落成

宮司高向秀實

祢宜越智幸吉 雇桑野千速
主典日並治郎 同 吉田一徹
同 池浦晴吉 同 花田貫二
同 宗像繁丸
同 守嶋正直
名譽主典河野通来

〔表〕 御本殿渡殿拝殿御家上葺替 御修繕

并

大正元年十月卅一日假遷座
大正二年六月二日正遷座

御營繕 中野豊吉
囑托員

大工中野七平 家根職宗我泰助
同 永野茂一郎 同 波多江如平
同 内田太造 全 東合親治郎
同 永野喜社 全 符野友次郎
同 中野治三郎 全 五嶋円次
同 中野軍蔵 全 宗我馬吉

一 木工事費総額壹参百九拾五円

此内訳 内務省ヨリ
金八百円 各社共通營繕費御下渡
金四百六拾五円 本社基本財産利子支出

〔裏〕

- 一 内務大臣原敬本縣知事川路利恭内務省神社局長法字博士井上友一
- 一 假遷座奉仕神職 祢宜越智峰吉 主典宗像繁丸主典河野通来雇桑野千速 全吉田徹
- 一 正遷座奉仕神職 宮司從六位勲六等高向秀實主典池浦晴吉主典宗像繁丸主典守嶋正直 雇桑野千速
- 一 詰方船長河野勿助加子河野勿蔵全幸太郎全角助

(19)「宗像神社昭和造営誌」(宗像大社復興期成会、一九七六)。

(20)「沖津宮神殿並二拜殿改築願」[官国弊社各社共通金下附願]草稿、「宗像大社營繕書類」卷十八所収。

(21)「昭和七年八月七日工事報告」(「宗像大社營繕書類」卷十八所収)の全文は以下の通り(傍線は筆者加筆)。

「官幣大社宗像神社沖津宮御本殿幣殿神饌所並二拜殿改築ニ當リテハ内務省主任技師角南隆氏ノ設計ヲ基準トシ神殿流レ造リ幣殿拜殿神饌所共総体ヲ一棟トシ拜殿正面ハ切妻造リ向拜庇付後面神殿ニ取付神饌所横棟切妻造リ拜殿取付家根檜皮葺箱棟鬼板付本殿ニハ千木勝男木ヲ置キ総体素木造リトシテ昭和六年十月五日内務大臣ノ認可ヲ得タリ。本工事ハ航行不便ノ孤島ニ付直營工事トシテ直チニ着手セリ。木材ハ台檜ノ優良材ヲ撰ビ辺津宮ニ於テ乾燥ノ上荻原亀吉ヲ主任工匠トシテ切組ミ本年五月二日沖島ニ運搬全月十六日立柱祭全月二十一日上棟祭六月二十五日工事完了シタリ。本工事中最憂慮シタルハ海上及參道運搬ト狹隘ナル社地ニ納マリヨク建設出来ルカノ二点ナリシガ幸ニ神明ノ御加護ニヨリ豫期以上優秀ナル成果ヲ得タルハ欣幸ニ堪ヘザルナリ

茲ニ竣工ノ式典ニ方リ工事ノ概要ヲ述ベ以テ報告トス。

昭和七年八月七日 工事監督技師 三條榮三郎

(22) 昭和四十年代まで大島の漁師は、沖ノ島に小屋をかけて住み込みで漁をしており、その漁組織を「沖ノ島仲間」と呼んだ(『海の道』No.1「特集大島から沖ノ島を見る」沖ノ島物語実行委員会発行、二〇〇五)。

(23)「官幣大社宗像神社沖津宮社殿改築工事積算書」及び「宗像神社沖津宮御神座御壁代等新調精算書」(「宗像大社營繕書類」卷十八所収)。

- (24) 角南隆の経歴は、角南隆『万物は生きている』（株式会社パレード、二〇〇六）、藤岡洋保「内務省神社局・神祇院時代の神社建築」（『近代の神社景観』神社局時代に撮影された神社）神道文化会編、中央公論美術出版、一九九八）を参照した。
- (25) 藤岡洋保「近代の神社建築」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十三号、二〇〇六）。
- (26) 幡掛正木「宗像神社と葦津耕次郎翁」（『葦津耕次郎追慕録』あし芽會、一九四一）。
- (27) 宗像大社には大正期から昭和初期にかけて撮影された社殿・境内の古写真が五十三点（内訳は沖津宮「十八」、中津宮「五」、辺津宮「二十五」、香椎宮「二」、高良大社「三」）保管されている。これらは戦後、日本建築工芸事務所（角南隆設立）より神社本庁へ寄贈された内務省神社局及び神祇院局撮影の写真資料と一部合致する。（『写真資料目録』内務省時代に撮影された神社の景観、一九九五、神社本庁教学研究所発行）。
- (28) 藤岡洋保「内務省神社局・神祇院時代の神社建築」（前掲）。
- (29) 三條栄三郎の経歴は、母里喜久「三條栄三郎その足跡」（『西日本文化』一四九号、一九七九）を参照した。
- (30) 『宗像大社営繕書類』巻十八所収。
- (31) 「昭和七年八月七日工事報告」（前掲）の草稿文が『宗像大社営繕書類』巻十八に所収される。
- (32) 荻原亀吉の経歴は、荻原実氏（昭和二十四年生、荻原工務店代表取締役）、荻原哲夫氏（昭和二十八年生）に聞き取り調査に基づく（調査日時は二〇一六年十二月二一日、場所は荻原工務店事務所）。
- (33) 年毛神社の棟札には「大工棟梁荻原亀吉」、豊山神社の棟書には「設計者荻原亀吉」とある（佐藤正彦「津屋崎町の近世社寺大工と作風」（『日本建築学会中国・九州支部研究報告』第十号、一九九六）。前掲注（32）聞き取り調査によると、辺津宮楼門（大正十五年）、宮崎宮廻廊（大正三、六）、香椎宮楼門、若松恵比寿神社の造営に荻原亀吉が関与したという。
- (34) 松本将一郎「沖津宮遙拝所における信仰の建築と景観」（『沖ノ島研究』第一号、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議発行、二〇一五）。
- (35) 昭和十年（一九三五）十月十七日、内務省神社局技師角南隆・大島村尊重立石仲平・前当社宮司幡掛正木・大工荻原亀吉が辺津宮社務所に参集し、神社関係者を交えて復興計画、中津宮社務所改築について協議した（『宗像神社昭和造営誌』年表、六三八頁）。
- (36) 昭和七年八月七日の日付で、宗像神社宮司幡掛憲昌から荻原亀吉と小山富次郎の両名に沖津宮神殿・幣殿・神饌所・拜殿改築工事について感謝状を贈っている（『宗像大社営繕書類』巻十八所収）。
- (37) 『福岡県指定有形文化財宗像大社中津宮本殿保存修理工事報告書』（福岡県、一九九九）。
- (38) 葦津耕次郎の経歴は、葦津珍彦『葦津耕次郎追慕録』（私家版、一九七〇）を参照した。
- (39) 「官幣大社宗像神社沖津宮殿内装飾設計図 神座ノ部」（『宗像大社営繕書類』巻十八所収）。
- (40) 「官幣大社宗像神社沖津宮社殿改築工事設計書」（『宗像大社営繕書類』巻十八所収）。

